

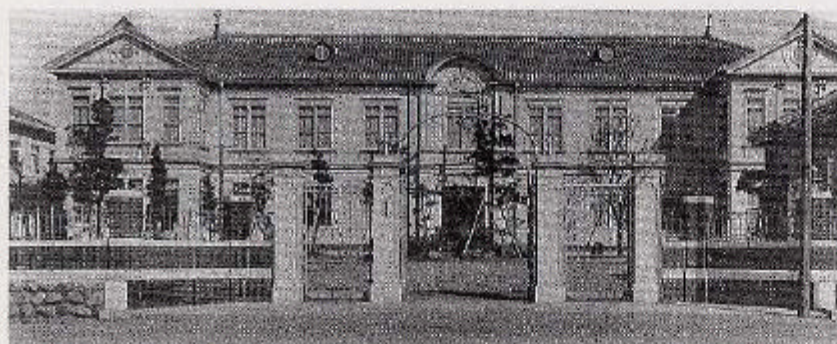
名古屋大学史資料室ニュース

<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/>

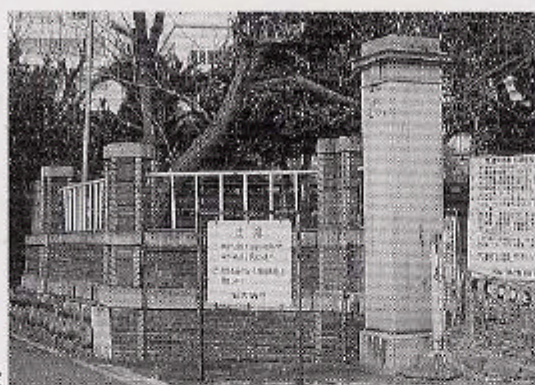
第6号

目次

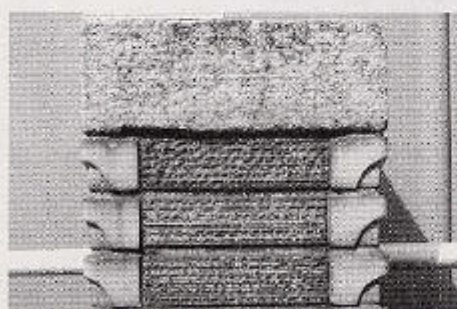
| | |
|--------------------------------|---|
| 歴史的視点の重要性と資料室 | 2 |
| 写真の力、ことばの力 文学部50周年記念写真集について | 3 |
| 受贈図書一覧 | 5 |
| 資料室日誌(抄) | 7 |



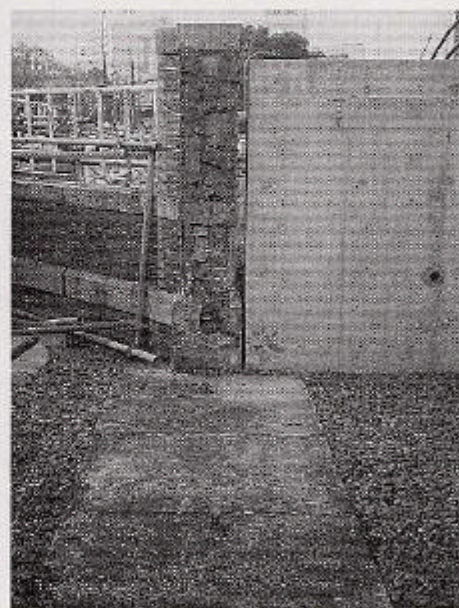
1



2



3

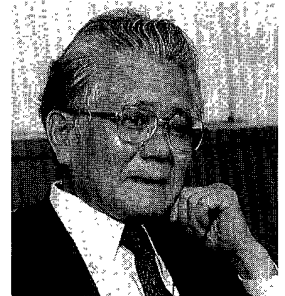


4

旧愛知県立医学専門学校・愛知病院以来の門と塙(4頁に解説)

歴史的視点の 重要性と資料室

名古屋大学総長 松尾 稔



本論では、主として、歴史的視点の重要性について日頃思っていることを述べ、最後数行で現在ひっ迫した状況の中で大学が迫られている“行革の一環としての大学改革と資料室の将来”について触れてみたい。なお、誤解を招かぬために最初に断っておくが、資料室がこれまでになしとげてきた成果が非常に大きく、また今後果たさなければならない仕事が十分意義深いことを十分認識した上で、最後の数行を書いているのである。

さて、私は昭和44年の秋、京都大学ブータン学術調査隊々長として、インドの北方地域通過許可をとるため、約40日間カルカッタとニューデリーで忍従の日々を過ごした。しかしこの時の経験がまた同時に、その後の私の人生に重要な意味を持つことにもなった。何故なら、その時の約1ヶ月間は、当時すでに京都大名誉教授で、学術会議副会長でもあられた桑原武夫先生（この隊の総裁）とほとんどいつも2人で過ごす機会を得、苦勞の多いインド政府との交渉のかたわら、文明・文化・歴史・社会・学問等々、非才の私にはもったいないほどの多岐に亘る個人教授を受けることになったからである。数え上げれば枚挙にいとまがないが、ある時の食事中に発せられた先生の一言だけを記しておきたい。“松尾ナ－、土木（私の専門分野）には学問としての歴史はあるのか？歴史のない学問はいずれ廃れる、廃れるものは廃れてもよいが、そこからの新しい展開はないナ－”と。また“ブータンへ行って、帰ったらよう考えときヤ、梅棹（忠夫先生のこと）の「文明の生態史観」も読んでみなハレ”と。その時私は33歳のかけ出しの京大助教授だったが、この言葉は強烈なインパクトを私に与え、帰国後土木学会で“土木史”の必要性を叫び、このことも多少の効果があってその4、5年後に学会内に土木史委員会ができ、現在まで継続している。そして、学問分野としても少しずつ形をなしてきている。また梅棹先生の上記著作を読んだときの新鮮さも忘れられない。

梅棹先生は京大士山岳会の先輩でもあったので、その後いろいろと教えてもらったが、先生によると、文明は「人間と装置と制度からなる巨大なシステム」、また文化は「生活の仕方一般」、つまり文明の精神的側面ということになる。文明を語る人が100人いれば100の定義があると云われるが、上記の定義は誠に分かり易い。

人が居る所、人が関与するものには必ず文明文化があるのが当然で、その背景にはこれまた必ず自然や環境も含めた歴史がある。国・民族・組織・都市・学問・技術・家族・自分自身、すべてしかりである。

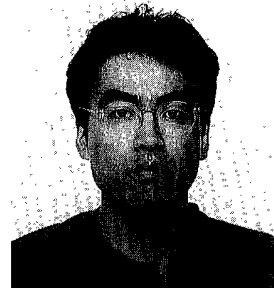
それでは、歴史を知ることが何故重要なのか。その“何故”に答えるのが歴史だからだと思う。私は工学が専門のため、つつい以下のような考え方をする習慣が身についてしまっている。すなわち、“望ましい姿はこういう姿だと思うのに、何故現状はこうなのか”とまず考え、次に両者のギャップを分析してそこに横たわる種々の課題、たとえば研究的課題、技術的課題、経済的課題などを抽出し、最後にその課題を解決するための具体的方法論を探す工夫をする、というプロセスである。この場合、最初に問題になるのが“今日のこの姿があるのは何故か”ということであり、それを知るために必須なのが今日に至るまでの歴史であり、そしてまたその歴史を知る基礎となるのが“広い意味”での資料である。文明は装置を含み、その装置の陰には必ず“広い意味”でのあらゆる資料があるから、文明は必然として常にその痕跡を残すのである。

と言うことで、名古屋大学という組織や学術分野に限ったとしても、それらに関する資料の、思想ある、系統だった保全と管理、専門家、非専門家を問わず常に情報を提供できるシステムを、基幹大学として有していることの重要性を私が実感していることは、上記のことから、もはや多言を要しないであろう。専門家と称する人には些細で役に立たないように見える資料が、別の分野・別の視点から見れば宝物のように輝ける資料になりうるが多々あることは、それこそ歴史の教えるところである。歴史的・社会的視点を持たずに、例えばモデル一本槍で、いわば学術をお玩具にしている学者と称する人たちをしばしば見かける苦々しさには耐え難い気がする。学生に対しても、歴史的、社会的認識を持って自己の専門性を高める習慣を身につけさせる指導や環境整備が大切である。彼らは本物の資料から感動を覚え、感性を働かせ、さらに自己の分野の倫理観に気付いていくに違

写真の力、言葉の力

—文学部50周年記念写真集について—

木 俣 元 一



文学部50周年記念事業の一つとして写真集を作ることになったのは、1997年の秋のことであった。広報担当のワーキンググループのメンバーに選ばれ、第一回の会議を行ったのが、編集後記に示されているようにその年の12月3日である。

そのころは、なぜ写真集を作るのかという必然性があり実感できなかった。また、私の専攻が美術史であるためかふだんから誤解をうけ、デザインのセンスなど少しもないのに、どういふわけかヴィジュアルがらみの雑務がこちらに回ってくることが多いという困惑も、多少はまじっていた。

美術史研究室前の廊下には、全国の美術館から送られてきた展示会のポスターが掲示してあるが、これらが研究室で製作されたと思われている方が教授会におられるとうかがって驚いたことがある。たしかに、美術史は何を研究しているのか分かりにくいけれども。

他のメンバーはどうか分からないが、少なくとも私は、このグループの委員長であった若尾教授のいつも変わらない熱意に引っ張られるようにして仕事をこなしていった。高校時代の委員会活動(学校新聞を作っていた)を思い出させる、他の委員の方々と一緒に行う編集作業自体の楽しさもあったのだろう。

最初のうちはこうした熱意にはどこか理解できないところがあったが、作業がゆっくりとではあるが進んでゆき、1998年の夏、最終段階が近づくとようやく共感できるようになってきた。つまり、写真集を作る意義が、その作業の終わりがけになって私なりにほんやりとわかりかけてきたのである。それはもちろん、50周年を記念するというのではない。

これは編集作業のプロセスと関連すると思われる。私は写真資料の複写と整理を担当し、学生に手伝ってもらってその作業を進めた。それが写真集製作の前提と考えたから

だ。なるほど写真そのものが見ていて楽しく、それだけでも様々な情報をもたらしてくれる。だが、編集作業の最終段階にいたって、写真にそえられる多様な執筆者の文章に眼を通したところ、驚いたことに写真がこれまでとくらべものにならないくらい生き生きとし始めたのである。そのとき、文学部の過去のいろいろな時間が、はっきりとしたリアリティをともなって私の中によみがえるような感覚もあった。

もちろんこれは歴史的に正確な過去ではないかもしれない。だが、そこに手で触れることができる何かがあるという、強い実在感を発散しているのである。それは、写真の提供する視覚的イメージの力と、言葉が提供する声の力が結びついて、両者を越えたある作用をもたらすようになったためであろう。

このときどきするような過去の実在感を見る人(というより、見て読む人)に味わってもらいたい、これが写真集製作の意図なのだろうとそのとき考え、何となく納得するところがあった。この意味で、名古屋大学全学の50周年記念の写真集とは異なり、写真と文章を半分ずつにするという独自のコンセプトで臨んだのは、とてもよかったと思っている。文学部の良さが出せたのではないだろうか。

ところで、この写真集の中で、とても印象的な写真が1

ないことを、私たちは忘れてはならない。

最後に資料室の将来について一言触れておく必要がある。現在は、政治・経済・産業構造を含むあらゆる分野で世界および日本の枠組みが大転換をとげつつあり、例えば国家公務員を中心にした行革の実行はすでに法的に決定されている。“国立大学だけは例外”はあり得ないのである。国立大学の独立法人化は現在まだ pending になっているが、大綱原案では法人化の対象として明記さ

れている。法人化されなくても、20%の定員削減は確実にやってくる。現在当資料室は学内措置としての共同研究施設であるが、仕事の重要性は冒頭に述べたとおりであり、いずれ図書館や、今後新設を期待している大学博物館等とも併せ、最善の道を皆さんと共に考えていきたいと思っている。

↗点ある。それはカラー・グラビアの最後のページにある、図書掛前の廊下にある図書カードの棚を写したものだ。

背後の白い壁に映る午後の光と、右に広がる暗がりの間にひっそりとたたずむ棚は、見る者の想像力をいたく刺激し、今その空間にいるのだという感覚を強く呼び起こしてくれる。棚の木の匂いや引き出しの重み、廊下に響く音、カードの紙の手触りなどがくっきりと再生される。文学部の現在を照らし出す様々な断片を、余分な説明を加えずに提示するというグラビア・ページの発想も、

この点でたいへん成功しているといえよう。

おそらく今後写真集を再び製作するようなことがもしもあるとすれば、それは50年後の100周年の折であろう。そのときにために、というよりもむしろ、現在や過去の断片をいつでも蘇生させることができるように、写真や映像を蓄積し、印刷物をはじめとする資料を保存することが必要であると編集を通じて痛感した。もちろん、そのための人員もスペースも文学部にはない。

(名古屋大学大学部)

旧愛知医専・愛知病院の門と塀

医学部の前身校、愛知県立医学専門学校および県立愛知病院が現在の鶴舞地区に移ったのは、いまから85年前の1914（大正3）年のことである。戦災や施設の更新によって当時の様子を伝える遺構はほとんどなくなったなか、鶴舞公園側に向かって開く二箇所の門（愛知医専正門および愛知病院正門）のみ、移転以来変わらぬ位置に往時の姿をとどめている。また公園側に続く塀は1914年建造ののち1930（昭和5）年に改修され、スクラッチタイルとテラコッタによって仕上げ直された。材料的にもデザイン的にも昭和初期の特徴をよく表し、鶴舞の風景の一部としてなじみぶかいものとなっている。

1993（平成5）年度以降進んでいた病棟の新築工事が大詰めの段階に至り、外構工事を行う関係上、この門および塀をどうするかという判断に迫られた。現状では門扉など鉄製の当初材は失われ（戦時中に供出）、4本の門柱のうち中央2本が車両の通過のため撤去または移動されるなど保存状態は良くない。また構造的欠陥があり、特に煉瓦積の塀部分は倒壊の危険性も懸念されたため、現物は撤去し新設のものでイメージのみ保存をするなど施設部内や現場でも様々な意見が出された。

しかし最終的には、できる限り歴史的な姿をそのまま後世に伝えようということから、門とのその左右数間の塀を保存することにした。そして遺構の史的価値を明らかにするために、構造補強のほか、洗浄・補修、鉄部など欠損部の新設、ライトアップや銘板の作成といった整備を行うことにした。これらの工事は、名古屋大学医学部学友会の寄付事業として、病棟が竣工する予定の今年6月を目標に進められている。

1. 移転当初の愛知県立医学専門学校正門（1914年 『愛知県立医学部専門学校・県立愛知病院新築落成記念帖』所収）
2. 現在の様子（1998年12月 鴻池／大成／村本 J V撮影）
3. スクラッチタイル（中央）とテラコッタ（隅部）
4. 工事の様子（門柱を一時移動し構造補強のためのコンクリート基礎を設けたところ。この上に門柱を立て鉄骨で固定する。筆者撮影）

(施設計画推進室 助手 木方十根)

受贈図書一覧（98年3月～99年1月）

| | | | |
|---------------------------|------------------------|-------------------------------|-------|
| 名古屋大学最終講義録 | | 学校法人関西学院 学院史資料室 | 4月23日 |
| 研究生活における思い出の出会い（1998年3月） | | 神奈川大学史資料集 第14集 | |
| | 岩垂好裕 3月 2日 | 神奈川大学大学資料編纂室 | 4月24日 |
| 地域的特性に基づく添加物処理による | | 藤沢市文書館紀要 第二十一号藤沢市文書館 | 5月 1日 |
| サイレージの品質改善に関する研究（平成10年3月） | | 四日市大学環境情報論集 第1巻 第1、2合併号 | |
| | 大島光昭 3月17日 | 四日市大学学会 | 5月 1日 |
| 日本大学史紀要 第4号 | | 信・望・愛 第4号 宮城学院資料室 | 5月11日 |
| | 日本大学大学史編纂室 3月17日 | 九州大学大学史料叢書 第6輯 | |
| 愛媛大学学報 No413 | | 九州大学大学史料室 | 5月19日 |
| | 愛媛大学五十年史編集室 3月19日 | 総長訓示式辞 | |
| 広島大学統合移転完了記念誌 | | （自明治四十四年四月 至昭和二十年八月） | |
| 翔べ!フェニックス 広島大学50年史編集室 | 3月20日 | 九州大学大学史料室 | 5月19日 |
| 大谷大学図書館蔵 | | 第24回日本医学会総会「医学史展示」図録 | |
| 西藏大蔵経丹殊爾勘同目録 II、2 | | 田中英夫 | 5月19日 |
| | 大谷大学真宗総合研究所 3月30日 | 愛媛大学 学報 No414 | |
| 龍谷大学三百五十年史 通史編 下巻 | | 愛媛大学50年史編集室 | 5月19日 |
| | 龍谷大学大学史編纂室 4月 1日 | 愛媛大学 学報 No415 | |
| 低く 強く 速く | | 愛媛大学50年史編集室 | 5月19日 |
| 名古屋大学アメリカンフットボール部二十年史 | | 関西大学年史紀要 第十号 | |
| | 木方十根 4月 7日 | 関西大学事業局出版部出版課年史資料編集室 | 5月22日 |
| 大学史紀要 紫紺の歷程 第二号 | | 新修名古屋市史報告3 名古屋市市政資料館 | 5月22日 |
| | 明治大学歴史編纂事務室 4月 9日 | 立命館大学国際平和ミュージアム 資料目録 第1集 | |
| 歴史編纂事務室報告 第十九集 | | 立命館大学国際平和ミュージアム | 5月22日 |
| | 明治大学歴史編纂事務室 4月 9日 | 北九州大学五十年史 北九州大学付属図書館 | 5月25日 |
| 学校法人 東京電機大学90年史 | | 香川県立文書館紀要 第2号 | |
| | 学校法人 東京電機大学 4月10日 | 香川県立文書館 | 5月28日 |
| 愛知県史研究 第2号 | | 香川県立文書館年報 第4号 平成9年度 | |
| | 愛知県総務部県史編さん室 4月10日 | 香川県立文書館 | 5月29日 |
| 立命館百年史紀要 第六号 | | 佐保路 第五号 中埜榮三 | 6月 1日 |
| | 立命館百年史編纂室 4月14日 | 佐保路 六（終刊号） 中埜榮三 | 6月 1日 |
| 中央大学史資料集 第十六集 | | 佐保路（号外） 中埜榮三 | 6月 1日 |
| | 中央大学広報部大学史編纂課 4月16日 | 東京女子大学の80年 東京女子大学 | 6月 1日 |
| 中央大学史紀要 第九号 | | 宮城学院最近10年小史 1987-1996 | |
| | 中央大学広報部大学史編纂課 4月16日 | 宮城学院資料室 | 6月 8日 |
| 中央大学百年史編集ニュース 第二十九号 | | 武蔵野美術大学年報 1993～1995（平成5～7）年度版 | |
| | 中央大学広報部大学史編纂課 4月16日 | 武蔵野美術大学大学史史料室 | 6月 9日 |
| 聖徳学園女子短期大学紀要 第30集 | | 人文論集 第33巻 第1号 | |
| | 聖徳学園女子短期大学図書館 4月17日 | 神戸商科大学経済研究所 | 6月22日 |
| サティア《あるがまま》 第30号 | | 人文論集 第33巻 第2号 | |
| | 東洋大学井上円了記念学術センター 4月23日 | 神戸商科大学経済研究所 | 6月22日 |
| 同志社談叢 第18号 | 同志社社史資料室 4月23日 | 名古屋大学情報工学教室二十五年史 | |
| 新島研究 第89号 | 同志社社史資料室 4月23日 | 名古屋大学大学院工学研究科 渡邊豊英 | 7月 1日 |
| 新島襄のキリスト教伝道 | 同志社社史資料室 4月23日 | 金沢大学教養教育機構研究調査部報 第2号 | |
| 流通経済大学三十年史 | 流通経済大学 4月23日 | 谷本宗生 | 7月 3日 |
| 関西学院百年史 通史編II | | 東京大学史紀要 第16号 東京大学史史料室 | 7月 3日 |

| | | | |
|----------------------------|-------------|-------------------------|----------------------|
| 梅花学園学園史研究 5 | | 愛媛大学50年史編集室 | 11月 2日 |
| 梅花学園学園史研究会 | 7月 9日 | 大学出版部協会35年の歩み | |
| 学報 May 1998 5 | 愛媛大学五十年史編集室 | 7月13日 | 大学出版部協会事務局 11月 6日 |
| 学報 June 1998 6 | 愛媛大学五十年史編集室 | 7月13日 | 開学二十周年記念誌 岡豊(おこう) 今昔 |
| 香川県立文書館史料集 1 | | | 高知医科大学 11月 6日 |
| 香川県立文書館 | 7月16日 | 福原学園50周年記念誌 資料篇 | |
| 医譚 第七三号 別刷 ローレツの通弁・朝山義六 | | 学校法人福原学園 | 11月 6日 |
| 田中英夫 | 7月23日 | 四日市大学環境情報論集 第2巻第1号 | |
| 井上円了センター年報 第7号 | | 四日市大学学会 | 11月10日 |
| 東洋大学井上円了記念学術センター | 7月24日 | 京都大学百年史 総説編 京都大学 | 11月13日 |
| サティア《あるがまま》 第31号 | | 新島襄に送られた手紙 同志社社史資料室 | 11月13日 |
| 東洋大学井上円了記念学術センター | 7月24日 | 上越教育大学創立20周年記念誌 飛躍 | |
| 人文論集 第33巻第3号 | | 上越教育大学 | 11月20日 |
| 神戸商科大学経済研究所 | 7月31日 | 神奈川大学70年のあゆみ(1928~1998) | |
| 人文論集 第33巻第4号 | | 神奈川大学大学資料編集室 | 12月 7日 |
| 神戸商科大学経済研究所 | 7月31日 | 仰岳Ⅱ 大分医科大学開学20周年記念 | |
| 佐賀医科大学開講二十周年記念誌 | | 大分医科大学 | 12月18日 |
| 佐賀医科大学総務部庶務課 | 8月13日 | 兵庫教育大学二十年史(1978-1998) | |
| 国立遺伝学研究所年報 第48号 | | 兵庫教育大学庶務課庶務係 | 12月24日 |
| 国立遺伝学研究所 | 8月14日 | 中央大学百年史編集ニュース 第三十号 | |
| 新修 名古屋市史 第七巻 | | 中央大学大学史編集課 | 12月25日 |
| 新修名古屋市史編集委員会 | 8月17日 | サティア《あるがまま》第33号 | |
| 高田短期大学紀要 第16号 | | 東洋大学井上円了記念学術センター | 1月25日 |
| 高田短期大学図書館 | 8月28日 | | |
| 四日市大学論集 第11巻 第1号 | | | |
| 四日市大学学会経済学部部会 | 9月 7日 | | |
| 名古屋外国語大学外国語学部 紀要 第17号 | | | |
| 名古屋外国語大学 | 9月17日 | | |
| 名古屋外国語大学外国語学部 紀要 第18号 | | | |
| 名古屋外国語大学 | 9月17日 | | |
| 新修名古屋市史報告書4 江戸期なごやアトラス | | | |
| 一絵図・分布図からの発想— | | | |
| 名古屋市市政資料館 | | | |
| 新修名古屋市史編さん事務局 | 10月 8日 | | |
| 写真集 名古屋大学文学部の五十年 1948-1998 | | | |
| 文学部創設50周年記念事業委員会 | 10月28日 | | |
| サティア《あるがまま》 第32号 | | | |
| 東洋大学井上円了記念学術センター | 11月 2日 | | |
| 愛媛大学 学報 No418 | | | |
| 愛媛大学50年史編集室 | 11月 2日 | | |
| 愛媛大学 学報 No419 | | | |
| 愛媛大学50年史編集室 | 11月 2日 | | |
| 愛媛大学 学報 No420 | | | |
| 愛媛大学50年史編集室 | 11月 2日 | | |
| 愛媛大学 学報 No421 | | | |

資料室日誌（抄）

- 8月 17日 江藤恭二名誉教授、資料寄贈の件で来室。
- 8月 29日 神谷助手、高山市出張（民衆思想研究会、30日まで）
- 9月 9日 名大名誉教授より、名古屋大学第八高等学校につき照会。岐阜県歴史資料館職員、資料閲覧のため来室。
- 9月 10日 学習院大学五十年史編纂室員より、戦後の八高の時間割につき照会。
- 9月 11日 名大教育学部教員、教育学部写真資料につき照会のため来室。名古屋大学史常任資料委員会（第14回）開催。
- 9月 16日 『名古屋大学史資料室ニュース』第5号、刊行。
- 9月 17日 南山大学50年史作成小委員会室員2名、写真資料閲覧のため来室。名大大学務部留学生課事務員、資料閲覧のため来室。
- 9月 30日 神谷助手、松山市出張（全国大学史資料協議会、10月2日まで）。中村助手、松山市、つくば市出張（全国大学史資料協議会、教育史学会、10月5日まで）。
- 10月 6日 名大大学務部留学生課事務員、資料閲覧のため来室。
- 10月 9日 名大施設部施設計画推進室員、資料閲覧のため来室。
- 10月12日 名大施設部施設計画推進室員、資料閲覧のため来室。
- 10月15日 名大教育学部事務員より、名大卒業生につき照会。
- 10月16日 名大教育学部教員、教育学部五十年史写真集作成のための写真所在調査のため来室。名古屋大学史資料委員会（第8回）開催。
- 10月19日 岐阜県立高校教員、資料閲覧のため来室。名大教育学部事務員、資料閲覧のため来室。
- 10月21日 城西大学教員より、名古屋高等商業学校卒業生名簿につき照会。
- 10月22日 名大施設部施設計画推進室員、資料閲覧のため来室。
- 11月 2日 神戸商科大学教員、資料閲覧のため来室。名大施設部施設計画推進室員、資料閲覧のため来室。名大文学部教員より、臨時教育審議会につき照会。
- 11月 6日 名大施設部施設計画推進室員、資料閲覧のため来室。
- 11月11日 浜松北高等学校同窓会事務局より、愛知県立医学専門学校につき照会。
- 11月16日 名大教育学部事務員、1950年頃の教育学部授業科目及び担当者につき照会のため来室。
- 11月19日 愛知県立大学教員より、1971年頃の学費値上げ反対闘争の時期につき照会。
- 11月21日 神谷助手、京都市出張（日本史研究会、22日まで）。
- 12月 9日 中村助手、東京都出張（国立国会図書館、国立公文書館、11日まで）。
- 12月11日 名古屋大学史常任資料委員会（第15回）開催。
- 12月16日 山口助手、福岡市出張（九州大学、18日まで）。
- 1月 11日 名古屋大学史資料委員会（第9回）開催。
- 1月 19日 事務局の拡張計画に伴い資料室の一部を共同教育研究施設1号館2階に移転。
- 1月 21日 南山大学50年史作成小委員会室員より、1941年の高等学校入試の実施形態につき照会。
- 1月 26日 平成10年度名大停年退職教員に資料寄贈依頼の文書送付。

Nagoya University Archives

Nagoya University Archives(NUA) was founded in April 1996, as a inside measure in Nagoya University. NUA has its origins in the Office of the Compilation of the History of Nagoya University established in April 1985, which edited "Fifty Years History of Nagoya University". The publication was planned as one of commemorative works for 50th anniversary of Nagoya University.

NUA collects and archives all kinds of historical materials on Nagoya University. Its purpose is not only the collecting of the above materials, but the research on the history of Nagoya University, moreover that of higher education. NUA's holdings are institutional records, University or other publications, oral history collections, drawings, photographs, memorabilia collections, manuscripts, faculty papers and so on. NUA provides information and records created by, for, and about the University to faculty, staff, students, and the public for research.

The office consists of several teaching staffs of School of Education and School of Letters.

| |
|-----------------|
| 名古屋大学史資料室 |
| 室長 篠田 弘 (教授・併任) |
| 専任室員 神谷 智 (助手) |
| 中村 治人 (助手) |
| 山口 拓史 (助手) |
| 事務員 増田 よしみ |

題字 加藤延夫前総長

名古屋大学史資料室ニュース 第6号
Nagoya University Archives News No.6

発行日 1999年3月16日 (年2回刊)
編集発行 名古屋大学史資料室
名古屋市中種区不老町〒464-8601
電話(052)789-2046・2048
印刷 株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38